

子牛生産地としての基盤強化と「壹岐牛」のブランド化

長崎県壹岐市農林課 飯田雅浩

歴史ある壹岐の農畜産業

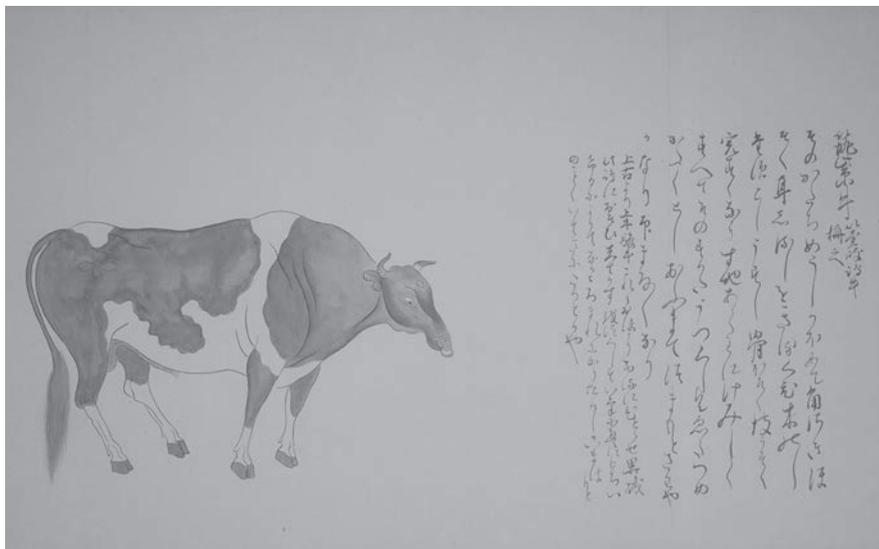
壹岐島は、九州北部の玄海灘に浮かぶ東西一五キロメートル、南北一七キロメートル、人口約二万四千人の平坦な島です。「魏志倭人伝」や「古事記」にも登場するなどの歴史があり、平成一六年三月に郷ノ浦町・勝本町・芦辺町・石田町が合併し壹岐市が誕生しました。福岡県の博多港から高速船で一時間、フェリーで二時間、佐賀県唐津港からフェリーで一時間四〇分、長崎空港から飛行機で三〇分と交通アクセスもよく、ビジネスや観光などに気軽に訪れることができます。

平成三〇年には国の「SDGs 未来都市」に選定され、環境・経済・社会の三面の取り組みにより持続可能な社会づくりを目指しています。また、今年は地元の県立壹岐高校野球部が春の選抜高校野球大会に二一世紀枠で選ばれ、島内外で

おおいに盛り上がりました。

壹岐では対馬暖流の影響により、温暖な海洋性気候の下、農畜産業が盛んに営まれています。以下で紹介する肉用牛に加え、水稲、麦類が基幹作物で、離島ながら長崎県内では二番目に広い深江田原平野があることで、県内有数の穀倉地帯にもなっています。また、壹岐には七つの酒造会社があり、島内で生産された大麦を使った焼酎づくりが行なわれています。壹岐は麦焼酎発祥の地とされ、平成七年の「地理的表示の産地指定」によって「壹岐焼酎」のブランドが国際的にも認められるようになりました。ほかにアスパラガス、いちご、メロンなどの施設園芸品目や葉たばこ、花き類も生産されています。

島の和牛の歴史は古く、市内の平安時代の遺跡からも牛骨が出土しています。国産の牛を解説した鎌倉時代の図説『国



『国牛十図』(東京大学農学生命科学図書館所蔵)。

『牛十図』においても、「筑紫牛」の名前で杵岐産の牛は姿が良
いと、紹介されており、当地が昔から牛の名産地であったこ
とをうかがい知ることができます。

古来、農業が盛んな杵岐では、主として田畑の耕作を手伝
う農耕用に牛が用いられていました。うろ覚えですが、私の
幼いころ、郵便局員との兼業農家であった祖父が、朝早く牛
を連れて出かけて行き、郵便の仕事前に牛に鋤を引かせ、昼
間は木陰に休ませ、夕方にもた同じ作業をして、牛と一緒に
家へ帰って来ていた記憶があります。機械化が進み、農耕用
に牛を利用することはなくなりましたが、その肉質の良さか
ら牛の生産は島に残りました。

子牛の生産基盤の強化に向けて

肉用牛の繁殖経営は、島内の農業算出額全体の七割を占め
る基幹作目です。杵岐家畜市場では、年に六回、偶数月に子
牛セリ市が開催され、毎回約七〇〇頭、年間四〇〇〇頭余が
島内外に取引されています。親牛の血統、繁殖雌牛との掛け
合わせ、育成状況などの飼養管理が徹底された子牛が多く揃
っていることから、杵岐の子牛セリには、全国から有名ブラ
ンド和牛の肥育農家がい付けに來ます。セリ落とされた子
牛は、その後、各地で約二〇カ月間育てられ、全国的にも有

名な「まつさかうし松阪牛」「ひだうし飛騨牛」「おうみうし近江牛」などとして市場へ出荷されていきます。

しかし、近年の国際情勢や円安の影響を受けた飼料価格の急激な高騰、物価上昇に伴う消費者の節約志向、嗜好の変化などによる消費量の低下が逆風となり、島内の畜産農家にとっては苦しい経営が続いています。子牛価格も低迷しており、

沓岐家畜市場での子牛一頭当たりの平均価格は、平成二八年の八四万八千円から、令和六年には五万一千円まで落ち込んでいます。販売価格の下落に対する国の補給金制度や飼料価格への補填制度はあるものの、畜産農家の高齢化や後継者不足も加わり、昭和五八年には繁殖農家戸数二七六六戸、繁殖雌牛頭数八五五一頭であったものが、令和七年三月末現在、

それぞれ四七八戸、四九九七頭となるなど、畜産農家の離農・廃業、それに伴う飼養頭数の減少が続いています。

本市では、これらの課題に対応するため、畜産農家の仕事を一時的に代行するヘルパー組織や粗飼料の収穫を担う「コントラクター」といった労力支援システムの構築、「子牛共同育成施設（キャトルステーション）」、母牛の発情監視や授精を受託する「繁殖牛受託施設（CBS・キャトルブリーディングステーション）」など、管理作業軽減のための外部管理施設を整備し、子牛生産地としての生産基盤の強化を図っています。



全国から仲買人が集まる子牛のセリ。



子牛生産の拠点施設「キャトルブリーディングステーション」。

「壹岐牛」ブランド化の取り組み

壹岐市内には、令和七年三月末現在一四経営体の肥育農家があり、一四八五頭が飼養されています。一四経営体のうち一〇経営体が壹岐市農協肥育部会に属し、ここで肥育された牛が「壹岐牛いぎぎゅう（後述）」として出荷されています。また、同部会員が多くの島内産子牛を購入しており、壹岐家畜市場の買い支えとなり、取引価格の安定にもつながっています。

壹岐島の繁殖農家で生まれ、肥育農家で育てられ、島を一度も出さず育てられた「壹岐牛」は、年間九〇〇頭ほどしか市場には出回りません。それは壹岐の肥育農家が協力し合って品質を守り、希少性と付加価値を付けるため、あえて厳しい定義（下表参照）を設けて情熱を注いで作り上げたブランド牛だからです。

これらの条件をクリア

壹岐牛の定義

- ①「壹岐生まれ、壹岐育ち」の黒毛和牛であること
- ②「壹岐市農業協同組合肥育部会構成員」で育てられた牛であること
- ③「一支國配合飼料」という指定された配合飼料で肥育されていること
- ④「枝肉格付で肉質等級が5等級、4等級、3等級」の格付けの牛であること



潮風を浴びながらのびのびと育つ壹岐牛。

した牛のみが「杵岐牛」を名乗ることができず。杵岐牛は、島特有の潮風により適度な塩分を含む粗飼料を食べて育つため、ミネラル分豊富で肉質は柔らかく、霜降りでありながら脂は上品で、あっさりとした食感があります。まさに肥育農家がプライドをかけて育てた、美味しさが保証された牛肉です。繁殖・肥育の地域内一貫体制と杵岐牛ブランドの確立を積極的に推進したことで、平成二六年には特許庁より、「杵岐牛」の地域団体商標登録が認められました。

農畜連携による資源循環

五月中旬、杵岐では深江田原平野のあちらこちらで、黄金色に実った大麦の刈り取り風景を目にすることができます。収穫後に残った麦わらは、梱包され繁殖雌牛に給餌されるほか、「杵岐市堆肥センター」に運ばれ、牛糞と混ぜ合わせることで、完熟堆肥として生まれ変わり、再び圃場へ還元されます。これにより化学肥料の利用低減にもつながっています。

また島内では、焼酎づくりの過程で排出される「焼酎かす」の処分が課題となっていました。現在では、その一部を飼料として活用しています。焼酎かすについては、「栄養価が高く、与えた繁殖雌牛の体重、体つきや毛つやが良くなった」「飼料の食いつきがよくなった」といった農家の声が寄せられ

るほか、高騰が続く配合飼料の量を抑えられるため、経費の削減にもつながっています。これら資源循環型の農畜連携は、まさにSDGs未来都市である杵岐ならではの取り組みです。

杵岐の畜産業の未来

畜産業のみならず、杵岐市の農業が抱える課題は、農家の高齢化と後継者不足、人手不足です。これは、本市に限らず全国共通の課題だと思えます。杵岐の畜産農家の多くは、三頭〜一〇頭規模のいわゆる少頭飼農家です。このような農家が山間部や狭くて条件の悪い圃場にも粗飼料の作付けを行なうことで、農地としての維持・保全が図られてきました。しかしながら上述の課題に、飼料高騰と子牛販売価格の下落も重なり、一気に畜産農家の廃業・離農が進みました。耕作放棄地や荒地となつていくところも多く見られるようになり、今後ますます増加していくことが懸念されます。

国に対しては、農家が農業で生活できるような体制を今一度構築していただきたいです。なぜ農業のなり手がいないのか、と問われれば、それは現状の農業は儲からないからだと思えます。いくら農業機械やスマート機器、施設整備に補助金が出ても、最終的に儲からなければ経営は継続できません。実際、過去に補助事業で牛舎を建築し、繁殖雌牛を導入し、農



島内で楽しめる吉岐牛のステーキ。

業機械も導入した農家が、近年の販売価格の下落で経営が行き詰まっている事例が島内にはいくつもあります。国際情勢や為替相場、消費者の嗜好などは各農家で解決できることではありません。農業が儲かるようになれば、自ずと就農したいという人が現れます。それが、後継者不足や耕作放棄地の問題解決につながっていくと考えています。

吉岐市には、吉岐牛をはじめ、吉岐焼酎、ひきとおし（島の伝統的な鳥鍋）、吉州豆腐（いしゅうとうふ）、吉岐黄金（ばれいしよ）など、島ならではの魅力的な食材や料理が豊富にあります。また、六月の「ツール・ド・吉岐島（自転車ロードレース）」、一〇月の「吉岐ウルトラマラソン」など、大規模なイベントも毎年開催しています。是非、皆様にお越しいただき、お楽しみいただけます。とともに、吉岐の農畜産品の応援もよろしくお願いたしました。

飯田 雅浩（いだまさひろ）

昭和四八年三月一日生まれ。長崎県吉岐市石田町出身。高校卒業後、大学進学を機に吉岐を離れるも四年後に帰郷。平成七年四月に石田町役場（現吉岐市役所）に入職。税務や福祉、生活保護、会計担当部局などを経て、現在、農林課三年目。